

北元と高麗との関係に関する考察

- 禡王時代の関係を中心に -

チェレンドルジ (Ts. Tserendorj)

(モンゴル社会科学院歴史研究所)

[原文は韓国語、翻訳：李へり (韓国外国語大学)]

1. 北元に対する高麗の外交路線の変化

北元と高麗の関係は大きく「恭愍王時代」と「禡王時代」という二つの時期に分類することができる。恭愍王時代に高麗は、元と明が角逐する合間を縫って自主性を強化させる政策を繰り広げた。1369年、恭愍王政権は、元との関係を断絶し、明との事大関係を樹立させた。それだけでなく元の領土を征討するなど、敵対的な態度を示した。恭愍王のこのような措置は、あまりにも性急な判断だった。一方で、恭愍王は事実上北元との関係も完全には断絶できずに両端外交を行った。

1372年前後に北元は、国内外の安定を回復させ、高麗に対する外交活動も活発化させた。しかし、恭愍王が親明政策を取り続けたため高麗に対する懐柔政策は失敗した。

恭愍王を継承した禡王時代に、北元と高麗の関係には大きな変化があった。恭愍王が殺害された後、北元が瀋王脱脱不花を高麗王に任命したことを見れば、当時噂になっていた北元が国王を交代させたという話もあながち嘘ではなかった可能性もある。親明外交路線を取っていた恭愍王が1374年9月に殺害された後、恭愍王が主導していた親明外交路線は混乱に陥るようになった。¹

恭愍王が殺害され、同年11月頃、貢馬を徴集するために高麗に派遣されていた明の使者である林密、蔡斌などが、帰途の途中にある開州站到着した際、護送官の金義が蔡斌とその息子を殺害し、林密を捕らえて北元に逃げる² という事件が起きた。明に請諭・承襲使、告訃使として派遣されていた使者たちはこの事件のことを聞くや否や早々に帰還した。これにより高麗と明の間の友好関係は事実上断絶した。その後も明の問責を恐れた官吏たちが使者として行きたがらないことによって、高麗は恭愍王殺害と明の使者殺害事件が発生した直後に明に対して適切な解明をすることができなかった。従って、禡王の王位継承を通報し、その承認を得るのが難しくなった。

1374年11月、ナガチュ（納哈出）がムンバラブカを高麗に派遣し、駱駝1頭と馬4頭を持ってきたが、これは恭愍王の³殺害後、北元から来た最初の使者であった。使者を通じて恭愍王の死後の情勢を把握しようとしていたようだ。

¹ キム・スンジャ、韓国中世の韓中関係史、ヘアン、2007、82頁。

² 高麗史卷133、列伝46、辛禍 1、11月。

³ 高麗史卷133、列伝46、辛禍 1、11月

それから1ヶ月後の12月、李仁任政権は判密直司事の金湑（キム・ソ）を北元に送り、恭愍王が没したことを知らせた⁴。これにより、恭愍王の殺害事実は明より先に北元に通報された。禡王が即位した後、李仁任政権では明と北元どちらも事大の対象国として認め、禡王冊封を要請した。つまり、恭愍王末期の親明一辺倒の外交路線に変化があった⁵ということだ。

しかし、金湑（キム・ソ）を北元に派遣したのは、恭愍王の喪を知らせるためであり、これは禡王の冊封とは無関係であった。喪を知らせることと王位継承の承認に対する要請は別のことであった。つまり、恭愍王の喪を知らせると同時に恭愍王時代まで続いていた親善関係を維持しようとする狙いだった。しかし、このように先制の使者を派遣したことを北元が逆手にとり、禡王冊封にまで関与し始めた。その後起こったことが、それを裏付けている。禡王元年（1375）正月にナガチュ（納哈出）が使者を高麗に派遣して正式に関与しはじめた。ナガチュは「先王には息子がいないが今誰が王位を継承したのか」と聞いた。ナガチュがこのような質問をしたのは、この時すでに、恭愍王に代を次ぐ太子がいないので瀋王暲の孫である脱脱不花を奉って高麗王にしていってしまったからだ。しかし、李政任などは、明・元どちらに対してもいい顔をする両面外交路線を選んではいたけれども、王権のことまで北元の要求通りにするのには反対であった。

同年4月、李仁任が何人もの臣下たちを従えて孝思観に出て行き、太祖の霊魂に誓って、「本国の無頼漢たちが瀋王の孫を手懐けて北側の辺境に来て王位を窺うので、我々同盟する臣下たちは力を尽くしてそれを防ぎ新王を助け奉ります。この誓いに変わりがあれば、天地と宗廟社稷が必ず隠密な罰を下す」⁶、とした。つまり、李仁任らは瀋王を高麗王に擁立した事件に反対し、自分たちが推戴した禡王の地位を少しでも揺るがしてはならないということを表明するための対策だった。

同月に判事の朴思敬が北元から帰還し、明德太后に次のように告げた。

ナガチュ曰く「貴国の宰相が金義を派遣して、王が亡くなったのに後継ぎがなく瀋王を奉って王にしたいというので、皇帝は「瀋王を」奉って貴国の王にした。もし、先王に息子がいれば朝廷から絶対に瀋王を送りはしない」と、いった。⁷

この話を聞いた恭愍王の母親である明德太后は李仁任を呼びつけ「宰相が金義を元に派遣したという話は私も聞いて久しい。そなたたちは知らないのか」⁸と、聞いた。ここで言及されている朴思敬

⁴ 高麗史卷133m、列伝 46、辛禡 1、12月

⁵ キム・スンジャ、前出の書籍（2007）、83-84頁

⁶ 高麗史節要卷30、辛禡元年4月。

⁷ 高麗史卷126、列伝39、姦臣 2、李仁任：「納哈出謂臣言、爾國宰相、遣金義請云、王薨無嗣、願奉瀋王爲主故、帝封爲爾主。若前王有子、朝廷必不遣瀋王也。」

⁸ 高麗史節要卷 30、辛禡元年4月：「太后召仁任曰、宰相遣金義如元、予聞此言久矣。卿等獨不知乎。」

をいつ北元に派遣したのかについての記録はないが、北元に派遣された金湑の副使として派遣したとみる見解⁹がある。

ちょうどその頃明の使者を殺して北元に逃げた金義の部下が高麗に戻ってきたが、この時李仁任と安師琦らは彼を手厚くもてなした。これを見た朴尙衷は国王に上訴文を提出した。

金義が使者を殺した罪を当然追及しなければならないにも関わらず宰相たちが犯人の随行員たちを手厚く待遇しているということは、安師琦が金義をそそのかして使者を殺させた証拠となるものです。つまりこの罪を明かさなければ今から国の災いが始まります。¹⁰

この上訴に対しては久しく対応されなかったが、この時になって太后がその上訴を都堂に下し、また安師琦を監獄に入れた。その後、安師琦が他人の家に逃げていき刀を取り出し自決すると、その死体を処刑した。¹¹ これを見ていた李仁任は、「金義の元への派遣は、賛成事・康舜龍、知密直・趙希古、同知密直・成大庸らがやったことだ。」とし、彼らをみな遠方へと流刑にした。¹²

次いで同年4月高麗は、判密直・李子松を西北面都巡問使兼平壤尹に、賛成事・池齋を西北面都元帥に、門下評理・柳淵を東北面都元帥に任命し、各道の兵を徴発して北元の侵攻に対して守備させたが、後に国境の情勢は平安であるという情報を受けてすぐに中止した。¹³

高麗はただ対外的に圧力を受けただけではない。瀋王に協力する余地を持った人物たちが高麗の国内にも依然として存在していた。僧である小英が自分の手下何人かを北方に送り、秘密裏に瀋王に書信を渡して「今の国の状況は、臣下が王様を殺し、また王様が臣下のゴマすりに騙されている。国権はただ権勢のある臣下の手の中で手籠めにされているので、もし今の時期に兵を起こしてくれれば大事を成すことができる¹⁴とした。また、禍王元年(1375) 9月に泥城元帥崔公哲の下、200人が反乱を起こし軍民たちを殺害して鴨緑江を渡っていった。¹⁵ こうした事例は禍王即位の初期における親元勢力の活動を示すものと言える。こうした状況の下で、李仁任政権はどんな対策を使ってでも瀋王が高麗国王に擁立されるのを防がなければならなかった。1375年4月に李仁任は百官たちと共に連名で文を書き北元の中書省に訴えようとしていた。その文書には次のように書かれている。

世祖皇帝が王業を成すときに、我国の忠敬王がいち早く皇帝に謁見するために入朝し、皇帝のご恩

⁹ 池内宏、「高麗末における明及北元との関係」□史學雜誌□, 29-1, 2, 3, 4/ 1917, 満鮮史研究□中世 第三 冊, 1963, 282面.

¹⁰ 高麗史卷112, 列伝25, 朴尙衷: “尙衷上疎曰: 金義殺使之罪, 在所當問, 宰相待其從者甚厚. 是師 琦嗾義殺使, 其迹已見. 今若不正其罪, 社稷之禍, 自此始矣.”

¹¹ 高麗史節要卷 30, 辛禡元年4月.

¹² 高麗史節要卷 30, 辛禡元年4月.

¹³ 高麗史卷 133, 列伝46, 辛禡元年4月.

¹⁴ 高麗史卷 133, 列伝46, 辛禡2年7月: “今國家, 臣弑其君, 主諛臣諂, 國柄專在權臣, 若引兵來, 大事可成.”

¹⁵ 高麗史卷133, 列伝46, 辛禡元年9月.

を被り、貴朝廷の世襲する王たち及び駙馬（皇帝の娘婿）たちの礼に準じて王位を授かりました。そして、忠烈王は公主（皇帝の娘）を与えられ駙馬（皇帝の娘婿）となり、忠宣王が生まれ、忠宣王から忠肅王が誕生し、これまでもすべての王位が世襲されてきました。しかし、英宗皇帝の時に、江陽君王滋の息子であり、我が王室の支派に分かれていった完澤禿、瀋王暲が現れ、王位を争奪しようとしたけれど、貴朝廷が判別してくれたので実現できなかったのです。その後、先王である伯顔帖木兒は、まさに忠肅王の息子として襲位しており、その24年に遺言で彼の真の息子である元子の王禡が襲位するように指示しました。謹んで判密直事・金湑を派遣して先王の訃音を伝えさせたところ、彼が貴朝廷に行った今になって知ることになったのですが、完澤禿、瀋王の孫である脱脱不花は、我が国に嫁にきた公主の皇孫でもないのに邪な野望を抱いて王位を争奪するために力を入れている。これは、世祖皇帝が制定したのとは大きく違反することなので禁止してくださることを願います。¹⁶

しかし、左代言の林樸、典校令の朴尙衷、典儀副令の鄭道傳は、「先王が計策を決定して南の明を慕っていたのに、今や北の元を慕うなら不当である」と、言って署名しなかった。¹⁷

つまり、李仁任政権は、北元の軍事作戦に備えると同時に外交での打開策を考え、北元に高麗王として擁立した脱脱不花を廃位させることを要請したのである。この文書が、北元に伝えられたのかどうかは明らかではない。これに対し、高麗から文天式を北元に派遣し、その文書を伝えたという推測がある。¹⁸ しかし、北元で禡王2年（1376）10月に高麗に伝えた擴廓帖木兒の書信に「伯顔帖木兒王には、息子牟尼奴があり、国民の推戴を受けて国事をしているという事情を抄兒志から聞いて知った」としているため、上記の文書は北元に伝わらなかったようだ。抄兒志は禡王2年2月に高麗に行ってきた人でもし文天式が上記の文を北元に伝えていたなら、北元がその後から来た抄兒志から高麗の事情を聴き知ったとは言わなかつたらう。

どうやら当時李仁任政権が取った脱脱不花を拒否した措置は情勢に合っていた。先王が殺害され新王が冊封もされていないところで、たとえ虚名に過ぎなかったとしても脱脱不花を王に推戴すれば危険なので、どんな計略を使ってでもそれを防ぐ必要があった。

これより一カ月後の1375年5月に北元が使者を派遣してきた。彼は、その前に（1374年12月）金湑を北元に派遣して恭愍王の葬事を知らせた後、北元から送られてきた使者であった。

この使者が持ってきた文書には、「バヤンテムル（恭愍王）は我々を裏切り、明に付いたので貴国の王を殺した罪を許す」とあった。この時に李仁任と池瀾が元の使者を迎えようとしたので、三司左尹の金九容、典理摠郎の李崇仁、典儀副令の鄭道傳、藝文應教の權近などの激しい反対に会い、使者

¹⁶ 高麗史卷126、列伝39、李仁任

¹⁷ 高麗史節要卷30、辛禡元年4月

¹⁸ 池内宏、前述の論文、294面

は開京に入れなかった。李仁任などは賛成事・黄裳を西北面道体察使に、左副代言・成石璘を体察使として任命し、江界に派遣して北元使者を慰勞し送り返した。その結果、彼らが高麗に来て直接脱脱不花の王位継承問題を掲げることを防ぎ、国の根本を覆す混乱を予防した。¹⁹

1375年8月に泥城萬戸は、「瀋王母子が反逆者である金義と進奉使金涓の群れを従えずに信州に到着した」と報告した。これに高麗が恐れ、いくつもの道の兵士を徴發して北元の侵略に備えた。しかし、この知らせは嘘であったことが明らかになった。この時鴨緑江以北で頻繁に略奪事件が発生し、高麗では金義が北元の軍隊を連れてきたと疑ったが、瀋王の軍隊ではなく難民であることが確認された。²⁰ その後約半年間北元と高麗の間で使者の交換は行われなかった。高麗は、禡王2年(1376) 2月に 李原實を送ってナガチュ(納哈出)を訪問させた。同年5月、北元から吳抄兒志が来ると、禡王はこれを手厚くもてなした。²¹ 明との関係が断絶され、北元との関係の最も重要な問題である脱脱不花の高麗王擁立問題も解けず、禡王即位自体も不安定を感じると、これを解決するために高麗の朝廷では、ナガチュを通じて北元との公式的な関係再開を試みた。この時まで高麗は北元の使者を受け入れなかったため、北元にも高麗に対する不信感があった。しかし、ナガチュに使者を送った数日後に安州の副元帥王安徳は瀋王が死んだと報告した。北元との外交関係再開を取り巻く高麗官吏たちの葛藤は早くから学界の注目を受けており、当時の政治勢力を親明派、または親元派に分けて説明する傾向が一般的であった。ただ、一部の学者たちはこうした立場を批判しながらこの葛藤は単純に外交関係に対する見解の差からくるわけではなく、高麗国内の政治勢力間の政治的対立の結果であったと主張した。そして、当時執権勢力であった武将たちが北元との外交関係に積極的であった理由は、明が高麗に対して高圧的な姿勢を取ることで反明の雰囲気が高潮しており、特に明の使者の殺害事件により明との外交関係が収拾しにくくなった事実と、北元が脱脱不花を高麗王に冊封することで、高麗を軍事力で脅威した状況を指摘した。²² 北元との公式的な関係の再開は単純に軍事衝突を防いだり、禡王冊封を受けるための行為であるとは説明しにくい。特に、当時北元で高麗を軍事的に圧迫したことはなく、北元の軍事が高麗の領土を攻撃してきたという情報は嘘であったことが後日明らかになった。大体、北元との関係の再開は、対内的及び対外的という二つの目標の下で行われたと言える。対内的には当時執権者であった李仁任などにとって、彼らの執権を持続させるためには対外的安定が必要であり、このため明に対して一方では使者を送りながら、また元とも関係を持ち、両国の脅威の中で自国の利益を図った。²³ 北元との関係再開は明との関係を絶つという意味ではなかった。李仁任

¹⁹ 盧啓鉉、高麗外交史、甲寅出版社、1994、635頁

²⁰ 高麗史卷114、列伝27、楊伯淵

²¹ 高麗史節要卷30、辛禡2年5月庚午

²² 金塘澤、「高麗禡王元年(1375) 元との外交関係再開をめぐる政治勢力間の葛藤」、震檀学報 83, 1997.

²³ 高惠玲、「李仁任政権に対する一考察」、歴史学報、第91集、1981、24-25頁。

は、明の使者殺害事件とつなげて元と縁故のある 賛成・康舜龍、知密直・趙希古、同知密直・成大庸などを流刑にして、親明的な勢力非難に対する自分の名分を立てた。²⁴ また、李仁任、池籛らに対し、明との関係を絶ち北元との関係を再開させようとしているので、彼らを死刑に処してほしいと上訴した反対勢力をも大挙粛清した。こうすることで、李仁任らは自分の地位を確固たるものにして対外政策を勝手に施行していった。一方、北元との関係再開は対外的にはもっと重要な意味を持っていたと言える。先学たちが指摘した**禡王冊封**などは完全には否定しにくい事実だが、これより大きく重要な目的があったと言える。事実、禡王即位時点では東アジアの国際情勢に少なからず変化があった。特に、北元においては元順帝（妥懽帖睦爾）が大都（現在の北京）から北側に逃げた混乱期とは情勢がかなり変わっていた。北元は1372年に明の大規模な征伐軍を撃破し、政局も安定した。一方、遼東のナガチュ（納哈出）も1372年牛家庄を攻撃し、遼東の明軍に大きな打撃を与えた。雲南にあった北元の残存勢力もそのまま明に対抗しながら粘っていた。つまり、1374年前後の時期に北元は政治・経済・軍事的に比較的安定を取り戻した。恭愍王は、元がすぐに滅亡すると判断し、明と事大関係を結んだ可能性が高いが、実際の状況は推測とは食い違っていた。北元は簡単に滅びる存在ではなく、高麗もこれを実感するようになった。弱小国にとっては、国家を守る方法は強大国間の勢力均衡を取るより効果的な方法はなかった。しかし、恭愍王末期の高麗対外政策は強大国の勢力間のバランスが取れない、言い換えれば北元を排斥し、明側に傾いた極端なものであった。元をただ排斥するだけでなく、北元領土に対する数回の征伐も断行していた。だからといって、明の高麗に対する見方はよくなかった。明の遼東征伐に対する奨励は、高麗と元を窮地に追い込むときに利用する一時的な方法であって、彼らの狙いは完全に違っていた。遼東の北元勢力が崩れると明の次のターゲットは高麗だった。明は、1371年から遼東経営をしながらこうした態度を示しはじめた。国際状況の変化を高麗の執権者たちは知っていた。特に、北元との関係再開を牽引した李仁任、池籛、崔瑩などの**武将**たちは北元と手を結び日々高麗に圧迫を加える抑圧的な明をけん制しようと方向転換した。彼らは、明の攻撃など、非常事態が起きた場合、北元の軍事援助を受けて抗争する方法も考慮した。高麗の北元との関係再開は明をけん制しようとする北元と高麗の実質的な必要性から始まった、これは当時の東アジアの勢力均衡を維持しようとする努力の結果であったと言える。こうした状況だったので、李仁任など、高麗の執権者たちは反対勢力の強大な反発にも関わらず北元との関係再開政策を守った。高麗は北元と連合して明をけん制したり、少なくともこれを通じて明を圧迫して譲歩させようとした。

2. 事大関係再開過程とその終末

²⁴ Ibid. 20頁.

1376年7月、1年半前に北元に派遣された「判密直司事・金湑がナガチュ（納哈出）のところから逃げてきた」という記録から考えたとき、北元が彼を人質に捕らえた可能性もある。北元の朝廷は、高麗から派遣された吳抄児志（チョルジ）を通じて高麗情勢に関する詳細な情報を得て、李仁任などの執権者たちの本意を知った。これは、1376年10月、北元で兵部尚書ボロト・テムル（孛羅帖木兒）を派遣して伝達したココ・テムル（擴廓帖木兒）の書信で²⁵ 確認される。その書信には、当時高麗に対して北元が実施してきた政策、この間両国で行われたこと、北元と明との関係、明の本性が何なのかなど、重要な情報が反映されている。つまり、ココ・テムル（擴廓帖木兒）は、「禍王の父親である恭愍王と親しくしたこと」に言及し、続けて北元との関係は「義理の父と娘婿との関係から姻戚間」としており、「恭愍王が死んだ後に彼には子孫がないというので、禍王の一家の人で代を継ぐようにした」といった。次いで「これに対する詔書を伝えようとする使者を派遣したが、高麗で塞がれ、高麗が過誤に気づいて悟ることだけを待ち、やっと高麗が派遣した抄児志を通じて高麗が元を裏切らなかったということを知り、Bayan Temür（伯顔帖木兒王：恭愍王）には息子牟尼奴（禍王の幼名）がいて国事をしているという事情を知った」といった。そして、「国の人たちが王者（つまり、禍王）に服従すると言ってもまだ元の朝廷の責命を受けたことがないので、高麗の人たちの動向もその支持と反対がたぶんそれぞれ半々になるだろう」と、当時の高麗の最も重要で敏感な問題に触れた。こうすることで、禍王の冊封問題は迅速に解決しなければならず、これを解く主体は北元だということを知らせた。

また、「小国が大国に従う時必ず信任をもらわないと国を保存できない」と諭しながら、「高麗が元に再び戻らず朱元璋に仕えるなら、その時に朱元璋は高麗を侵略するであろうし、高麗がいくら大国を敬う礼を尽くすといっても明は高麗の財力を奪い、人民を移させ、社稷まで改めてしまうなど、どこまでやるかわからないだろう」と言った。最後に元は、「国土を回復させる大計を企てている途中であり、高麗は皇帝の命令に従えるならば、すぐ軍事を訓練し、軍馬を肥やして私たちと共に敵を前後にけん制することで、元の復興事業に貢献せよ！」としながら、「書信を受けて一日も早く使者を送れば元は必ずやいい措置を取るだろう」と、説得と威嚇を同時にした。後日、明と高麗との間に起こったことを見たとき、明の本性に対する北元の推測が合っていたことがわかる。

この書信に両国関係に対する「姻戚関係」という再三の言及は、北元はクビライ時代に結ばれた駙馬（皇帝の娘婿）関係というモンゴル優位の関係を自ら捨て、奇皇后の母国として高麗を姻戚関係として認める平等な関係に格上げし、²⁶ 北元は高麗を味方につけるためにこうした計略を使った。

²⁵ 高麗史卷133、列伝46、辛禡2年10月

²⁶ ユン・ウンスク「アーユシュリーダラ（愛猷識理達臘）」の活動と麗・蒙関係の変化」、東北亜歴史財団及び骨科学アカデミー共催韓・蒙関係の昨日と今日□2010 韓・蒙国際学術会議の発表論文集、ウーランバートル、2010、237頁

そして、1376年10月ナガチュ（納哈出）も右丞九住を派遣してきて、高麗に行っていた文天式を
送り返してきた。文天式は恭愍王17年（1368）10月皇太子の誕生日を祝賀するために元に派遣した使
者であった。彼はその8年後に高麗に戻ってきた計算になる。右丞相ココ・テムル（擴廓帖木兒）の
書信を受けた高麗の朝廷は禡王2年（1376）10月に密直副使孫彦を北元に送り、禡王の王位継承問題
と関連した百官連名書を北元の中書省に送った。それは禡王が恭愍王の遺志で即位し、北元皇帝の冊
封詔書が下される時を待っていたことを知らせるものだった。同年10月、高麗は開城尹黃淑卿をナガ
チュ（納哈出）に送り、ナガチュの使者九住の来訪に答礼し、12月ナガチュに書信を送って銀と羊を
贈り物としてささげた。²⁷ 翌年の禡王3年（1377）の正月にナガチュが使者を送ってきて、羊と馬を贈
り物として持ってきた。そして、2月北元から翰林承旨ボラド（孛剌的）を派遣し、王を冊封する命令
と酒と海東青を持ってきた。²⁸

北元の禡王冊封に対して「傾いていく北元としては、脱脱不花を最後まで高麗王として貫く力がな
く、それよりはいつそ高麗の権臣たちの要求通りにすることで、高麗の気を引いた方がいいだろうと
いう策であった²⁹、という解釈がある。しかし、この時は脱脱不花がすでに死んだ後だったので、事
実北元には高麗国王として立てられる人物もいなかった。

こうして北元は禡王3年（1377）2月に禡王を冊封し、これにより恭愍王18年以降断絶していた冊
封・朝貢関係がまた成立した。³⁰ 北元が禡王を冊封した時また尹桓など、6名に平章事という位を与
えた。次いでナガチュは、ムンバラブカを派遣して親善を図り、北元は豆口達を派遣して恭愍王神位
に祭祀をさせた。北元が高麗にこのような関心を示すと、高麗はついに北元の年号である宣光を使っ
た。³¹ 同時に「内外の獄事を判決する時にただ至正條格に従え！」³²という命を下した。

1377年3月に高麗は三司左使李子松を北元に派遣し、王の冊封に対する事例の文を捧げる³³と同時に
北元の皇帝をはじめとする統治者たちに贈り物を贈った。また、礼儀判書の文天式をナガチュに答礼
使として送り、多くの贈り物を与え、親善を強くした。ナガチュに送った文天式が6月に北元から帰
還した後に、北元に行っていた謝恩使の李子松も戻って来た。この時、「元の朝廷の臣下たちは李子
松が朝服を着て礼をつくす姿を見て、みな泣きながら『わが朝廷が北に移った後、軍事隊列の中で辛
い時期を送っていた時は今日もう一度礼儀を見られるとは考えもしなかった』とし、手厚くもてなし
た³⁴」という。

高麗国王を冊封し、その権臣たちの歓心を買ったと判断した北元は7月に宣徽院使チェリックテム

²⁷ 高麗史卷133、列伝46、辛禡2年10月

²⁸ 高麗史卷133、列伝46、辛禡3年2月

²⁹ 盧啓鉉、前述の書籍（1994）、638頁

³⁰ キム・スンジャ、前述の書籍（2007）、85頁

³¹ 高麗史卷133、列伝46、辛禡3年2月

³² 高麗史卷84、志38、刑法1、職制、辛禡3年朝：「中外決獄-遵至正條格」

³³ 高麗史卷133、列伝46、辛禡3年3月

³⁴ 高麗史卷133、列伝46、辛禡3年6月

ル(徹里帖木兒)を高麗に派遣して定遼衛を挟み撃ちすることを要請した。³⁵ これは北元としては復興の意志として強力な提案ではあったが、高麗は北元と明に対して両面外交を行っていた時であったので、これを受けるにも反対しようにもいささか難しいジレンマの立場であった。そこで、この提案を受け入れるよりは、うまく説得して時期を延長するか、その提案自体をうやむやにしようとした。

³⁶ 禡王は、北元の使者に金の帯と鞍を乗せた馬を与えたが使者は受け取らなかった。これは高麗が北元の要求を受け入れなかったからである。同年8月に高麗は啓稟使晋川君姜仁裕を北元に送り、³⁷ 姜仁裕は9月に北元から人を遣ってこれまでの事情を知らせてきた。その情報は、平章の文典成と大參政の張海馬は、ナガチュと共に軍事を訓練し軍馬を肥やし、高麗軍が来ることを待って定遼衛を攻撃する計画を立てているという内容であった。³⁸

これに対して高麗は、軍簿判書・文天式を北元に派遣して寒い冬だということを理由に軍隊を動員することは難しいと伝えた。つまり、軍隊動員を正式には断れず先延ばし作戦を使ったのだ。そして、高麗は11月に黄淑卿を北元に派遣して冬至を祝賀し³⁹、12月には王昇を派遣して新年を祝賀させた。

⁴⁰ 同月にナガチュが使者を高麗に遣わし、羊160頭と毛牛3頭を贈った。⁴¹

しかし、定遼衛征伐は北元だけが欲していたわけではない。倭寇が全州に侵入した時に都堂で敵の選択について相談したが、当時執権していた大臣の一人であった池齋は「倭寇はただ辺境をうるさくするだけなのでそれほど憂慮することはない。しかし、もし明の大軍が定遼衛に根拠地を作ってしまうと攻撃するのがとても難しくなるので兵力を回して遼を攻撃するのが上策である⁴²と主張した。倭寇の全州侵略というのは1376年9月倭寇が全州を陥落させたことをいう。これは北元が定遼衛を挟み撃ちしようとして提案する1年前のことである。したがって、池齋のこの言葉は高麗の執権者たちが北元との関係再開を試みながら明の遼東進出もけん制することを考えていた証しであるといえよう。一方、禡王が即位した直後から高麗は北元との関係再開を推進すると同時に、1374年末明に使者殺害事件が起こり、より悪化した明との関係を正常化させ禡王の冊封を受けるために地道に努力してきた。しかし、明はほとんど反応を見せず、高麗を外交的に圧迫する政策を繰り返した。

さらに1376年8月「定遼衛から秋に高麗を進攻する」という知らせが入った。この情報をつかんだ高麗は、各道に人を派遣して、軍隊を点検し、もしもの事態に備えた。⁴³定遼衛が高麗を進攻するということが事実だったのかどうかは明らかではないが、この知らせは高麗と北元との関係を促進させ

³⁵ 高麗史卷133、列伝46、辛禡3年7月

³⁶ 盧啓鉉、前出の書籍(1994)、639頁。

³⁷ 高麗史卷133、列伝46、辛禡3年8月。

³⁸ 高麗史卷133、列伝46、辛禡3年9月。

³⁹ 高麗史卷133、列伝46、辛禡3年11月。

⁴⁰ 高麗史卷133、列伝46、辛禡3年12月。

⁴¹ Ibid.

⁴² 高麗史卷125、列伝38、姦臣1、池齋；□高麗史節要卷30、辛禡2年10月

⁴³ 高麗史卷133、列伝46、辛禡2年8月

る役割を果たした。当時明は、国内問題に汲々としていて高麗を侵略する立場になく、これよりわずか2か月前に送った文書で要求した事項に対する高麗の反応を見ずして、急いで高麗をやっつけるといのはあまりにも性急なことであった。したがって、これは噂に過ぎなかった可能性が高い。たぶん、明と高麗との関係を綿密に伺っていた北元が、当時明と高麗の関係に改善傾向が見られないことを知ってこうした噂を広めた可能性は排除しにくい。1376年8月以降、高麗と北元との友好関係が速いスピードで推進するためにもこの事件がある程度作用したと思われる。高麗が北元と事大関係を結ぶと明も高麗に対して宥和政策を取り始めた。1377年12月に明がそれまで抑留していた高麗人の丁彦など、358名を送り返してきた。そうすると、高麗は1378年3月判繕工寺事柳藩を明に送り、皇帝の恩に対して謝礼し、また礼儀判書・周誼を派遣して恭愍王の諡号と王位継承の責命を要請する上表文を提出した。⁴⁴ そして同年6月に高麗使者(行人)である崔源、全甫、李之富なども釈放して送り返してきた。一方では、1378年(禍王 4年) 7月に北元の使者が来てトグス・テムル(豆叱仇帖木兒)の即位を報告しようとする、禍王は病気を言い訳に迎えに行こうとはしなかったが、使者が強要したので王が行省に出て迎えた。⁴⁵ 同年8月に周誼と柳藩が明から帰還したが、彼らは明の礼部商書・朱夢炎が皇帝の教示を記録して高麗人たちに見せる文書を持ってきた。この文書の主な内容は、明は高麗に対して内政干渉も使者の抑留もしないというものだったが、かえって高麗の明に対する姿勢を見守るという意味合いの強いものであった。⁴⁶

しかし、いくばくもしないで同年9月に高麗は明の洪武年号を再び使い始めた。これは一方では北元の皇帝が没し、新しい皇帝が即位したので、これまで使ってきた年号をそのまま使いにくく、他方では高麗に対する明の宥和政策と関連があった。洪武年号を使って親明態度を示すと、明は高麗に対する宥和政策を以前のような圧迫政策へと変えていった。高麗は、1378年10月に沈徳符を明に送り、新年を祝賀すると同時に版図判書の金宝生を送って崔源などを送り返したことについて感謝を表明したが、明の高麗に対する姿勢は中々よくなり、却って強硬路線へと旋回した。1379年正月遼東も指揮使が鎮撫任誠を派遣して洪武3年11月高麗軍が捕虜にした遼陽地方の遼陽地方の官民男女1千余人及び高麗に逃げてきた明の兵士たちを返還せよと要求した。⁴⁷ その理由は高麗が兵士を送って北元を助けてあげるからと言った。これを通じて明の高麗に対する懐疑がまだ解かれてないということがわかる。

一方、北元はほとんど1年ぶりである1379年6月に僉院甫非を派遣して、郊祀を行ない、年号を天元に改称すると報告した。また、ナガチュ(納哈出)もムンバラブカを高麗に送り付けてきた。禍王は、ムンバラブカが帰る際に、「丞相は、亡くなった父とお互いに兄弟だと称した」といい、苧布と麻

⁴⁴ 高麗史卷133、列伝46、辛禍4年3月

⁴⁵ 高麗史卷133、列伝46、辛禍4年7月

⁴⁶ 盧啓鉉、前述の書籍(1994)、643頁

⁴⁷ 高麗史卷134、列伝47、辛禍5年正月

布をそれぞれ150匹（むら）ずつ与え、⁴⁸ 彼らに親近感をあらわにした。また、高麗は同年7月に永寧君王彬を北元に派遣して郊祀を行ない、年号を変えたことを祝賀した。12月にナガチュが鷹と羊を贈り物として送ってきた。

このように高麗は明の洪武年号を使った後も、北元と続けて外交を結んでいた。明との関係がまだ正常化しておらず、緊張関係が続いていたため高麗としては北元との関係を絶つことを急ぐ必要はなかった。他方では、高麗が明との事大関係を回復させても北元と関係を維持する両端政策を維持することを決定した可能性も否めない。

禡王6年(1380)、永寧君王彬が北元の詔書を持って帰還し、同年2月に北元は、礼部尚書の時刺問、直省舎人の大都閫を派遣して、禡王を太尉に冊封すると、王が百官を従えて郊外にまで出て彼らを迎接した。3月に高麗は、密直部使である文天式を北元に送り、節日を祝賀し、冊封に対して謝礼した。同年7月に北元は使者を派遣して、大事を頒布し、ナガチュも使者を派遣してきた。

北元との使者往来は、その後激減した。ナガチュの使者が最後に禡王9年(1383)1月に高麗を訪問し、昔のような友好関係を結ぼうと提案した。北元の朝廷から高麗に派遣した使者は最後に1384年10月に和寧府までやってきた。高麗は、護軍任彦忠を派遣し、この使者を労い説得して帰らせたが、交通が塞がっていて半年も逗留して帰っていった。その後北元と高麗の間には使者の往来が途絶えた。その理由は、1385年の遼東に対する明の攻略の始まりと関連している。明は、ナガチュを攻撃する前の1384年にナガチュと高麗の中間地点に居住していた女真部落を攻撃して、ナガチュと高麗の連絡を遮断させたのである。これにより、ナガチュ直轄領土を経由しなければ高麗に行けなかった北元の中央政府使者にとってもその往来が中断せざるを得なかった。しかし、これは完全に断絶されず必要な場合、いつでも再開可能な潜在的な状況にあったと言える。

結論にかえて

恭愍王を継承した禡王代から高麗と北元関係には大きな変化があった。高麗はただ明と事大関係を維持するだけでなく、一時期国交が断絶した北元とも関係再開を試みた。

高麗が1369年に最後の使者を派遣してから5年ぶりである1374年に北元に告訃使を派遣したことを見ると、両国関係を再開しようとする要請は高麗が先に出した。早くから高麗との関係再開を試みていた北元はこのようなチャンスをうまく利用した。

高麗の北元との関係再開は、明をけん制しようとする北元と高麗の実質的な必要性によって始まった、当時の東アジアの勢力均衡を維持しようとする努力の賜物であるといえる。このような状況であったため、李仁任など、高麗の執権者たちは反対勢力の強力な反発にもかかわらず、北元との関係再開政策を守った。その結果、禡王3年（1377）2月に北元が禡王を冊封することにより、恭愍王18年以

⁴⁸ 高麗史卷134、列伝47、辛禡5年6月

降断絶していた冊封-朝貢関係がもう一度成立した。北元がこのように高麗の歓心を買うような態度をとるので、高麗はやっと北元の年号である宣光を使った。しかし、高麗は北元の主目的である明に対する共同作戦の提案に関しては回避した。高麗は、北元と明という両大国のうち、一方に偏った政策を取らず、両国と同時に関係を結びながら勢力のバランスを維持して実利を図ったからだ。結局北元との事大関係を利用して、明を圧迫することで、1378年高麗は明から禍王の冊封を受けた。

こうして、明と北元の両国をすべて事大の対象国として認めた関係が持続した。しかし、高麗が事大の主な対象と設定した国は明であった。特に、明との関係が再開した禍王4年以降は、高麗は北元との関係を維持したが、明との関係を基本にしていた。禍王6年までの北元との使者の交換も北元を事大の対象としてみなしたからだけではなかった。両国のどちらにも事大形式を取るのは当時の外交的な問題を解きほぐすためのひとつの方法であった。高麗の北元との関係の目的を、明の過渡な貢物要求をけん制し、新しい王である禍王の冊封問題を解決するためにあった⁴⁹という見解がある。しかし、高麗の目的はこれだけではなく、ずっと大きな目的である東アジアの勢力のバランスを維持しようとする意志であった。つまり、より強固となる明の勢力拡大を北元と手を組むことでけん制することにあつたといえよう。反面、高麗と北元間の友好関係は高麗だけが得するものではなかった。北側に迫いやられ国際的に厳しい状況にあつた北元にとって、一時期ほとんど断絶していた高麗との関係再開は何よりも重要であつた。高麗との関係が改善されれば高麗と連合して明を挟み撃ちし、少なくとも元帝国に属していた国家たちが背を向けた状態の当時は、国家の国際的な名誉と権威を回復するよいチャンスであつた。つまり、軍事的と外交的の二つの目的があつた。北元において高麗との友好関係がどれだけ重要だったのかを北元時代に両国間で交わされた使者の回数の約1/5は北元から高麗に派遣された使者であつた事実が物語っている。

禍王時代の北元と高麗の関係の最大の特徴は、高麗が初めて北元と典型的な冊封・朝貢関係を結んだという事実である。禍王3年から2年間続いたこの関係は元の干渉期に比べるとその性格がまるで異なる。それより160余年前のモンゴルと高麗関係が成立する時、高麗が願っていた関係の形であつたといえよう。

⁴⁹ キム・スンジャ、前述の書籍 (2007)、87頁

参考文献

I. 史料鄭麟趾など、『高麗史』、北韓社会科学院民族研究所翻訳、ヌリメディア。

『明史』、北京、中華書局、1997.

□『元史』□ (A Mongolian translation from Chinese by Ch. Dandaa), Volume I-XXII, Foreword and textological study by Ts.Tserendorj, The Institute of History, The National Library of Mongolia., Ulaanbaatar, 2003-2004.

II. 著書

1) 韓国語

キムスンジャ、韓国中世韓中関係史、ヘアン、2007.

盧啓鉉、高麗外交史、甲寅出版社、1994、

ユンウンスク、モンゴル帝国の満州支配史、ソナム、2010.

2) モンゴル語 Ч.Далай, Монголын түүх (1260-1388), УБ., Эрдэм, 1992.

III. 論文

1) 韓国語：高惠玲 「李仁任政権に対する一考察」 歴史学報、第91集、1981.

金塘澤 「高麗 禍王 元年（1375）元との外交関係再開をめぐる政治勢力間の葛藤」 震壇学報83, 1997.

ユンウンスク、「アユシリダラの活動と麗・蒙関係の変化」、東北亜歴史財団及びモンゴル科学アカデミー共催韓-蒙関係の昨日と今日 2010 韓・蒙国際学術会議の発表論文集、ウーランバートル、2010. チェックメド・チェレンドルジ、「14世紀後半東アジアの国際情勢と北元と高麗の関係」、韓国学中央研究院、韓国学大学院博士学位論文、2010

許興植、「高麗末李成桂の勢力基盤」、歴史と人間の対応: 高柄翊博士華甲紀念史学論集、ハンウル、1984.

2) その他

池内宏、「高麗末における明及び北元との関係」 史学雑誌、1917, 29-1, 2, 3, 4

Ts.Tserendorj, 「A royal rescript of Emperor Ayushridar of Mongolia to the Koryo king and some issues on the relationship between Northern Yuan and Koryo」, Acta Historica , No10, Mongolian State University of Education, Ulaanbaatar, 2009.